＝DOUBLE＝

高室ユキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
＝ＤＯＵＢＬＥ＝

【Ｎコード】
Ｎ８１０４Ｂ

【作者名】
高室ユキ

【あらすじ】
怪盗キッドにパートナーが存在した！《作者の考えたオリキャラ＞朱音＜が登場する話です》犯罪者が集まる地下街の非合法クラブで快斗と朱音は偶然、コナン達が追う組織の人間を見掛け発信機を仕掛ける。後日辿り着いた先は黒の組織の本部ビルだった…。コナン＋まじ快にオリキャラを含めたオールキャラストーリー！

Ｅｐｉｓｏｄｅ００：プロローグ～怪盗の憂鬱（前書き）

いよいよ本編のスタートです。

　かなりの長編連載で至らないところもありますが、お付きあいよろしくお願いします。

Ｅｐｉｓｏｄｅ００：プロローグ～怪盗の憂鬱

今になってよくよく考えてみれば、の話だ。
あの『犬も歩けば棒に当たる』と言う言葉がまさにお似合いと言っていい――行く先々で必ず何かしらの事件に巻き込まれる“アイツ”が追っている事件に、どうして何の関わりもないオレ達は首を突っ込んでしまったのか――。

□■□■□

そもそもの始まりはヤツに対する“些細な違和感”だった。
鈴木財閥の所有するビッグジュエル【漆黒の星（ブラック・スター）】を狙った一件――――あの予告状は、当時名を揚げていた高校生探偵・工藤新一を見据えて出した、言わば挑戦状のようなもの。
何故そんなことをしたかというと……オレも朱音も後から知ったことだが、キッドを窮地に追いやった“あの”時計台のヤマで現場の指揮に口を出していた例のジョーカーこそが工藤新一だったのだ。
はっきり言ってあのときはマジでヤバかった。
予定になかったダイブをするハメになり、そのせいで全身擦り傷だらけになって一週間は風呂に入るとき泣きを見るという……ありがたくもないオマケまでついた。
そんな痛い目にあったからこそちょっとしたお返しをしてやろうと思って、わざと暗号化した予告状を作り上げた。ヤツが鈴木財閥の次女と仲が良いのは調べるまでもなく同じ学校で同じクラスに通

う朱音に聞いて知っていたし、尚且つ暗号好きのシャーロキアンだってことを踏まえた上で。
必ずヤツはこの誘いに乗ってくる――――オレ達にはその確かな自信があった。

――――それなのに。
工藤新一は中継地点に選んだ杯戸シティホテルの屋上にいなかった。
その代わりと言っちゃあなんだが、小学生のガキがいた。
江戸川コナンと名乗ったその小学生を見たとき、怪盗としてのカンが働いたのか――オレは違和感を感じた。
まず纏う雰囲気が小学生のそれじゃない。そればかりか口調だってとても7、8歳のガキには思えない。
そして何よりも……オレはこのガキの持つ雰囲気を前に感じたことがある。

その後、オレはありとあらゆる情報源を使ってあのガキのことを調べた。気になった工藤新一のこともイチから洗い直した。
だが、オレはもちろん――オレより遥かな情報収集力を持つ朱音やジイちゃんの情報網を持ってしても、あのガキについては表面上についてのことしか分からなかった。
何よりも謎なのは、戸籍が見付からないこと。
日本中探しても、
『江戸川コナン』と言う名前の人間は法律上、この世には存在しないことになる。
これにはさすがの情報網を持つオレ達もお手上げするしかない。
ただ江戸川コナン本人のことは分からなくても、調べて分かったのが工藤新一が行方不明になったこと。それと入れ替わるように現れ

たのが江戸川コナンであり、居候先の探偵事務所所長・毛利小五郎が名探偵として活躍を始めたのもこの時期であること。

この奇妙な符合の一致は何を意味する…？

そのときは半信半疑だったオレ達の考えが確信に変わるまで、あまり時間はかからなかった。

またもや予定になかった４月の海へ決死のダイブ後、ほどなくしてオレと朱音は現在無人の工藤邸と家主のいない隙を狙って工藤家と懇意にしていると言う隣の阿笠邸に侵入し、それぞれに盗聴器付き小型カメラを仕掛けた。

これは自ら作った特製品だから簡単に見付からないし、発見器にも引っ掛からない造りになってるから万が一にも心配はない。とりあえずはそこからしかヤツのことを探っていくしか方法がないからな。

そして一つ目の収穫は、阿笠邸に仕掛けた方から転がり込んできた。

阿笠博士がコナンのことを『新一』と呼んでいた。最初は聞き間違いかと思ったが違った。

間違いなくヤツは『コナン』ではなく『新一』と呼ばれていた。

そして最近阿笠邸に居候し始めた少女もまた、ヤツを『工藤君』と呼ぶ。更には確信であろう『組織』や『毒薬』と言ったことも。なるほど……大体読めた。

『江戸川コナン』の正体は間違いなく、あの高校生探偵の『工藤新一』だ。

今までの話とオレ達が調べた情報からしてこれはほぼ確実だろう。
どうやらヤバイヤマに首を突っ込んだ挙げ句、謎の組織とやらに毒薬を飲まされ体が幼児化してしまったらしい。何とも夢みたいな話だが、現にヤツは何の因果か高校生から小学生になっている。
そしてあの女の子も名探偵と同じらしい。こっちは更に厄介で、なんと彼女は組織の元メンバーであり名探偵をあんな体にした薬の開発者だと言う。

この時点でオレも朱音も、もう首を突っ込むのは止めときゃよかったんだ。
……でも『組織』と言うのが気になった。
オレ達の追っている奴らと関係があるかもしれない。黒服にコードネームを使うメンバー、そして巨大な力を持つボスがいる――違うのはそのコードネームがオレ達の敵は酒の名前じゃないこと…。
それ以外はあまりにも一致点がありすぎる。
結局継続して調査を続けた。何かしら奴らの手掛かりが掴めるかもしれないと、淡い期待を抱きながら……。
その間に名探偵とは何度か接触したが、とりあえずは危なげなく切り抜けておいた。

そして事態は急転を向かえる。

なんと名探偵が追う組織をＦＢＩも追ってたことが分かった。
…オイオイ、マジかよそれ！

ＦＢＩだと！？
なんでアメリカの公的機関まで出てくんだよ…。しかも朱音の学校に赴任してた先生がＦＢＩの捜査官だって事実まで出てきた。
名探偵が追ってる事件は、思った以上に厄介で面倒なヤツらしい。
そりゃＦＢＩまで関わってんなら一筋縄じゃあ行かねぇだろうな。
何しろ巨大な見えない敵が相手だ、まるで雲を掴むようなモンだろ。
……ま、それはオレ達にも言えるけどな。
それがまさかあんな所で“彼等”を見付けてしまったことが、名探偵達の運命を変えることはおろか関わることはないと思っていたオレや朱音の運命さえ巻き込んだ戦いの序曲（プレリュード）であることを、このときのオレ達はまだ知る由もなかった――。

Episode01—chapter1：『レディ・レイリー』（前書き）

『レイリー』は朱音の、キッドの補佐をするときの呼称です。

Ｅｐｉｓｏｄｅ０１－ｃｈａｐｔｅｒ１：『レディ・レイリー』

１月某日
ＰＭ２２：５５

都内某所にある廃ビルの屋上に、一月の寒空の下、淡い月明かりに照らされて浮かび上がる細身のシルエット。
黒と白を基調としたコスチュームは一見落ち着いた雰囲気を見せている。ともすれば闇に溶けこんでしまいそうな色ではあるが、幸いにも今宵は満月も近い上弦の月の日であり、地上より高い場所にいるこの人物を遮ることなく照らし出していた。
黒いハットから出ている長い黒髪を左側で一つに結んで風に踊らせている人影は、体のラインを見る限りおそらく女性――しかしハットと右目にしているモノクルで顔は見えない為、年齢は不明だがまだ《少女》と言うべきところだろう。
その少女が手にした小型モニターに映る映像を目にしていると、左耳にかけたイヤホンが音を拾い始め、ほどなくして声が聞こえてきた。

『時間まで一分を切る。あとは手筈通り頼むぜ、レイリー』

「了解」

呼ばれた少女――レイリーはイヤホンが付いている左耳のワイヤレスマイクに向かい、相手に一言だけ告げると通信を止めた。
そして腕時計を確認すれば、時刻はまもなく午後十一時を示そうとしている。

モニター画面の中でも、刻一刻と時間が迫るにつれて、中森警部が部下に飛ばす激(げき)が激しくなっていた。
その様子を目にして、レイリーはクスリと笑う。

「相変わらずね、中森警部は」

なかば呆れたように呟く。

「いつもいいセンは行ってるんだけどねぇ、最後のツメが甘いんじゃいつまで経っても“アイツ”を捕まえるなんて不可能ね」

そうごちたところで、腕時計の針が十一時ちょうどを示す。

レイリーの纏う空気も同時にピンと張り詰めたものに変わり、そして。

「――Ｉｔ' ｓ　Ｓｈｏｗｔｉｍｅ！」

言いながら、レイリーは手にしていたリモコンのボタンを押す。

すると、モニターに映し出されていた映像が暗転した。
建物全体のブレーカーを落としたのだ。自家発電に切り換えるまで数秒はかかる。
今頃、現場では慌ただしく中森警部が部下に指示を飛ばしているはずだ。

だが、現場が混乱する暗闇の中――その数秒すらあれば“彼”にとっては充分なのだけれど。

数秒後、光を取り戻したモニターの中心に映し出されたショーケースの中、確かにあったはずの宝石は消え失せていた。
それは、まさに一瞬の出来事。
厳重な警備の中、透明な檻の中に鎮座していた物言わぬ宝石（レディ）は、当初の予告通り奪われたのだ。

あの、『月下の奇術師』と謳われる白き犯罪者の手によって――。

Episode01―chapter1：『レディ・レイリー』（後書き）

レイリーのコスチュームは、安室奈美恵のアルバム
「PLAY」のリード曲
「HIDE&SEEK」のプロモの衣装だと思って下さい。
かっこいいので、お巡りさんをイメージした感じが。あとはキッド
と同じく母の形見のモノクルを右目にしています。
分かりにくいですが、
大体感じとって下されば。
次回はキッドが出てきます！

Ｅｐｉｓｏｄｅ０１－ｃｈａｐｔｅｒ２：怪盗キッドのファーストレディ（前書

あんまり話が進んでません（汗）とりあえず、暫くは快斗達ばっかの話です。コナンが出るのはいつかなぁ……（遠い目）

長々ですが、お付きあいよろしくお願いします。

Ｅｐｉｓｏｄｅ０１－ｃｈａｐｔｅｒ２：怪盗キッドのファーストレディ

このビルからあまり遠くないところで、けたたましくパトカーのサイレンが聞こえている。どうやら今日も今日とて見事にダミーに引っ掛かったらしい（毎度毎度のことだが）中森警部以下警察の皆さまは、レイリーのいる逃走経路地点の廃ビルとはまったく正反対の方向にパトカーを走らせて行ってしまったようだ。

「毎回毎回…よくもまぁ同じ手に引っ掛かるよなぁ…いい加減、手口くらい分かってもいいのに」

「――ホントだよなァ。

中森警部には悪ィけど、やっぱ白馬の野郎がいねーとスムーズ過ぎて張り合いがないね」

呆れながら言うレイリーの言葉に答えるように、その声は彼女一人だったはずの空間に突如入り込んできた。にも関わらず、レイリーはそれが至極当然のことのように動じることなく、声のした背後を振り返る。

そこには、光のない闇の中でも目立つであろうトレードマークとも言える白いマントを風になびかせ、悠然と月明かりを浴びて佇んでいる人物が一人いた。

闇夜に映える白い姿は月光を受け、更に神秘的に見える。

彼こそがたった今、警察がはびこる美術館からマジックの如く鮮やかな手口でターゲットの宝石を盗み出した、今最も世間を騒がす神出鬼没の大泥棒・怪盗１４１２号。

通称――『怪盗キッド』

「あら、そんなこと言うなんて珍しいんじゃない？
今回の警備、中森警部は結構自信あったみたいなのに」

警察さえ手玉に取る天下の大泥棒を前にしてなお、レイリーに動揺した様子は見られない。
それもそのはず。
レイリーはキッドがこのビルに来ることを知っていたから。
彼女は怪盗キッドの共犯者――それは自分達以外誰も知らない、キッドにとってかけがえのないパートナーでもある。

彼女は唯一彼が心を許した存在――言わば『怪盗キッドのファーストレディ』

「…あれが自信作だってんなら、オレ、警察はもうオワリだと思うけど」
コツコツと靴音を響かせながら、キッドはレイリーへと近付いていく。
「それ、警部が聞いたら怒るわよ？」

「……怒る？　私はただ有りのままの事実を述べただけなんですがね。
ミス・レイリー嬢？」
先ほどまでの砕けた口調とはえって変わり、彼はキッド時に使うの丁寧な言葉遣いで答える。
「はいはい。で、今日の獲物は？」
そんなキッドに対し、構わずレイリーは話を進める。自分達はたった今、窃盗という犯罪行為を終えたばかりで、しかも一人は逃走中で…のんびり話をするつもりでここにいるわけではないのだ。
「……お前ねぇ、少しはムード出そうって気ィないワケ？　オレがせっかくだなぁ…」
文句を言いながら、それでもスーツの懐に手を入れるところを見ると彼自身逆らう気はないらしい。
今宵の獲物は【インペリアル・ジェード】と呼ばれる最高級品質の翡翠。アジア圏最大のそれは、もちろんビッグジュエルに数えられているものの一つだ。丁寧にハンカチに包まれた翡翠を露わにすると、キッドは一度小さく息を吐いた。
これから行われる行為はキッドとレイリー、二人にとって予告状を出してから盗み出す一連の行動の中で最も重要な部分に位置する、最大のキーポイント。まだ若い彼等が次々と進んで犯罪を犯すのも、すべてはただ一度、その瞬間をこの目で見届けるため。毎度毎度のことにも関わらず、このときばかりはいつまで経っても……それこそ多くの場数を踏んだ犯行（ショー）の最中以上に緊張する。
期待と不安、焦燥を繰り返して入り混じる心。

キッドはゆっくりと、宝石を月にかざした。

月明かりをを受け翡翠は本来の色を輝かせるが、宝石ごしに見えるのは深緑色を通しての幻想的な月のみであり、彼等の求める紅の光は欠片も見当たらない。

それほど期待してはいなかったが、やはり落胆の色はどうしても隠せない。

溜め息を吐き、その手を下ろす。

「……ハズレだ」

言いながら、時価数千万はするだろう宝石をキッドはレイリーに向けて放り投げた。

目的のものでないそれは、最早キッドにとって何の価値もない。

それはキッドと同じ意志を持って行動するパートナーのレイリーにとっても同じことだった。

受け取った宝石を一応の意味を持って自分の目で確認するも、当然のように目当てのヒカリはなく、手を下ろしたレイリーは宝石を手に遊びながら、今回はどうやってこれを中森警部に返そうかを考えた。

目当てのものでない以上、これは自分達に必要ない。だとすれば正当な持ち主の元に返すのが一番と言うのがキッドとレイリーの考え方だ。

僅かに考えた後、レイリーが出した答えはいつも通り警視庁捜査二課宛てに送り付ける方法だった。

そうと決まれば話は早い。レイリーは冬の間だけ着る黒のジャケットの内ポケットに、丁寧にハンカチで包んだ宝石をしまった。

そのときの中森警部の反応が頭に思い浮かぶ。

それを想像したレイリーの口許が笑みの形に綻んでいたのを、キ

ッドと夜空に浮かぶ月もまた、静かに見ていた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ０１－ｃｈａｐｔｅｒ２：怪盗キッドのファーストレディ（後書

快斗と朱音は片親を殺されたと言う同じ《心の傷》を持つ同志です。だからこそ、何よりも互いの気持が分かります。コナン側から見れば、キッドはただのこそ泥で盗んだものを返す愉快犯にしか見えないですが、事実は何よりも重い過去と使命、重圧を背負って孤独に夜空を飛んでいる。おそらくコナン達の中の誰よりも、キッドが一番背負う背景は重い。この話では、その辛さを半分受け持つのが朱音です。応援よろしくおねがいします。

Ｅｐｉｓｏｄｅ０２：日常一景（前書き）

不定期更新ですが、がんばってこれからも書いていきたいと思います。

タイトルは“にちじょういっけい”と読みます。

Ｅｐｉｓｏｄｅ０２：日常一景

♪キーンコーンカーンコーン…

軽やかなチャイムが響き渡るここは都内にある江古田高校。
本日最後授業―ちなみに二時間続きの現国―が終了したばかりの2年Ｂ組は教師が退出した途端に騒がしくなり始めた。どことなく女子がそわそわしているのは、バレンタインデーが間近に迫っているからだろう。今月に入ってからはどこのクラスも似たような状態だった。

そんな賑やかすぎる教室内でただ一人、本日の授業の大半を机と仲良く過ごしていたであろう人物が、呑気に欠伸をしながら起き上がった。
毎度おなじみ、黒羽快斗である。

「ふぁ～……ん？　もう帰りか？」

寝起きでまだ回転の足りない頭、快斗が放った第一声は何ともマヌケな言葉だった。
……まぁ、快斗が不思議に思うのも無理はない。何故ならこの黒羽快斗、今日一日の授業時間は丸々寝て過ごしていたのだ。時間軸があやふやになっていてもおかしくない。
快斗が覚えている最後の記憶と言えば、ぼーっとした中で食べた昼飯がサンドウィッチだったな…と言うどうでもよすぎることだった。

（ヤベ…ちょっと寝過ぎたか…）

まだぼんやりとする頭で快斗は思った。

快斗自身、授業中に寝るのはいつものことなのだが、ここまで意識を飛ばして爆睡するのは随分と久しぶりだった。

（…徹夜明けの学校って…やっぱ仕事よりきついかも…）

「あ～っ、快斗やっと起きた！　ずっと寝てるなんて、一体学校に何しに来てるのよ！」

内心溜め息を吐いた快斗に向かい、幼馴染みである中森青子が怒鳴った。

「うっせーなぁ、昨日寝てねーんだから仕方ねーだろ…」

「あ、また朝までゲームでもしてたんでしょ？　それで学校来て寝てるなんてダメじゃない！」

「ヘイヘイ、そりゃオレが悪うございました！」

（昨日は珍しくオメーのオヤジに追い掛け回されて大変だったんだよ…）

青子のお説教に悪いと言っておきながら本当は少しもそんなことを思っていないだろう軽口を返しつつ、快斗は昨夜のことを思い出していた。

青子にも言ったとおり、昨日一睡もしていないのは嘘ではない。

していないと言うより出来なかったと言ったほうが正しいかもしれないが。

昨日は自分のもう一つの姿――怪盗キッドの予告日だった。

出て来ると多少厄介な白馬探はロンドンの空の下……今回は鈴木財閥でもない以上、あの名探偵も現場にはいない。必然的に相手はいつもと同じ中森警部率いる……最早顔馴染みとなった警察の面々だけであり、キッドとパートナーのレイリーは“今回も”楽勝の内に仕事を終えた。

すべての問題はその後だ

毎回毎回怪盗キッドにしてやられてばかりの中森警部が、今回こそはと『打倒！キッド逮捕策』として新たな作戦を仕掛けて来たのである。

そのシステムと言うのが、これまた厄介過ぎるシロモノだった。快斗にとって苦い記憶の中に入る、あのグランパパ並に※まじっく快斗2巻参照※

操作する警察側のデータベースに侵入したレイリーがそのシステムを破壊してくれたから良かったものの……結局中森警部との鬼ごっこが終わったのは夜明け近く、東の空がうっすらと白み始めた頃だった。

（ハハ…、あのヘボ警部も厄介なことしてくれるぜ…）

おかげでこっちは寝不足もいいとこだ、と昨夜―正しくは今朝―の出来事に快斗は苦笑いせざるをえなかった。

「お父さんもキッドのせいで昨日から帰って来ないし！　あんなサイテー泥棒、早くお父さんに捕まっちゃえばいいのに！！」

「まーあのヘボ警部じゃ一生かかっても逮捕は無理だろーなぁ。
なんてったって相手は怪盗キッド……確保不能の大怪盗なんだからよ！」
（ま、このオレがそう簡単に捕まるわけないけどなｖ）

帰り支度をしていた快斗がにんまりしながら言う。
まさか目の前にいる幼馴染みが、自分の父はおろか日本警察すら手玉に取る憎き怪盗とは夢にも思わない青子は自分の父をバカにされて頭に来たらしく、怒った顔で快斗を睨み付けた。

「何よ、自分もちょっと手品が出来るからっていっつもキッドの味方しちゃってさ…。
あんな泥棒、すぐにお父さんがギッチョンギチョンにしてやるんだから！」

バンッと青子が快斗の机を叩く。

「ヘイヘイ。ま、そんな日が来ればの話だけどなｖ」

ケケケと笑いながら、その発言にまた反論してくる青子を面白がって見ている快斗の、学ランのポケットに入れていた携帯が小さく震えた。
気付いた快斗がポケットから取り出したのは、ホワイトシルバーカラーでストラップが一つだけしてある、とてもシンプルな携帯電話。画面を見れば、アイコンがメールの受信を示していた。

２００７／２／１２　１５：１０

Ｆｒｏｍ　あかね
Ｓｕｂ　Ｒｅ：
［ｔｉｔｌｅ］　３時半、ＢＰ

―ＥＮＤ―

（３時半か…ならもう出なきゃ間に合わねーな、っと）

そう考えながら携帯を閉じて学ランのポケットにしまった快斗は、静かに立ち上がるとカバンを手に取った。

「快斗…？」

「悪ィ。オレ、先帰るわ」

きょとんとしている幼馴染みに笑顔で告げる。

「え、ちょっと、まだホームルーム終わってないよ？　先生には…」

「適当に言っといてくれ。
じゃ、また明日な」

快斗がニッと笑い、カバンを肩にかけるとそのまま青子に背を向けた。後ろで青子が何か言っていたが、快斗は気にせず軽く手を挙げただけで教室から出て行った。

目指すはプールバー『ブルーパロット』

快斗は急ぐべく、軽やかな足取りで階段を駆け下りていった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ０３―Ｃｈａｐｔｅｒ１：ブルーパロットにて～ひとときのコ

江古田駅前商店街に入ってすぐのビルの二階に、プールバー『ブルーパロット』はあった。

快斗の父であり先代怪盗キッド・黒羽盗一の公私に渡る付き人を務めていた寺井がオーナーのこの店は、少し寂れた雰囲気はあるが常連客に人気の穴場中の穴場となっている。

二階に続く階段を上がった先の入り口に『ＣＬＯＳＥ』の札が見えたが、快斗はそれを無視してドアを開けた。カランカラン、と軽やかに音を立てて鳴るドアベルの音を聴きながら中に入ると、カウンターの向こうから聞こえた声が快斗を出迎えた。

「これは快斗ぼっちゃま…いらっしゃまし」

優しく丁寧な言葉遣いで話しながら寺井は入ってきた快斗に穏やかな笑顔を向けた。

「よ、ジイちゃん…って、朱音まだ来てねーの？」

店を見渡しても寺井以外に人はいない。

「…いえ、朱音さまなら先に来ておられますよ。今は裏でお話中のようです」

…なるほど。

快斗が目を向けたカウンターの上には読みかけだろう女性ファッション誌が開かれたまま置いてある。

まぁいいやと、快斗はその席の右隣に座ると、疲れた様子でテーブルに突っ伏した。

「お疲れでございますね。昨日の中森警部は随分としつこいようでしたが…少しは休めましたか？」

「…寝られなかった分は学校で寝たんだけどね、でも全然寝足りないかも…。

悪ィんだけどジイちゃん、眠気覚ましにコーヒーくれない？　なーんか頭がスッキリしなくてさぁ…」

出そうになる欠伸を噛み殺しながら快斗が言うと、寺井は微笑んでから

「かしこまりました」とコーヒーを準備し始めた。

しばらくしてお熱うございますよ、と快斗の目の前に置かれたのは湯気を立てるブラックコーヒーの入ったカップ。快斗が小さく例を言いコーヒーを口に含むのと、カウンター裏にあるカーテンが引かれるのはほぼ同時だった。

快斗が目を向けた先には青のブレザーにプリーツスカート、黒のネクタイ――快斗の通う江古田高校のものとは違う……帝丹高校の制服を身に付けた少女、篠宮朱音（しのみやあかね）が立っていた。胸辺りまである長い黒髪は一つに結ばれている。

「お話は終わりましたか？」

寺井が訪ねると朱音は笑って頷いた。

「待たせちゃったみたいね…ジイちゃん、私にはカフェラテくれる？」

持っていた携帯をテーブルに置いて座り、朱音は快斗へと目を向けた。

「朝言ってたように学校で寝られた？」

「…まあな。お前は？」

快斗が訪ねると朱音は少し考えてから、

「体育の時間にね、体調悪いって言って保健室で寝たかな…ちょうど二時間続きだったし」

と言った。

「仮病使ったのかよ…」

「…失礼ね。少なくとも堂々と寝てるあんたよりは、マシだと思うけど？」

そう言って笑う二人とそれを微笑ましく見守る寺井、流れゆく空気は実に穏やかだった。

□■□■□

快斗と朱音、この二人は小さな頃からの知り合いだ。

朱音の母は快斗の父と同じく、世界的にも有名な女流マジシャン

だった。
――名を、篠宮由紀恵（しのみやゆきえ）と言う。
黒羽盗一が得意とするハンドマジックの一方、由紀恵が得意としたのはエスケープ（脱出）マジックだった。拘束されて箱の中に入れられ火をかけらても、次の瞬間には見事姿を現す――その華麗で美しい魔法のような脱出劇は世界を魅了し、『マジカルクイーン』『フーディニの再来』とまで呼ばれるほどだった。
また盗一と由紀恵、この二人は同じ師の元でマジックを学んだ同志でもあった。若い頃からの仲の良さは世界で認められ互いが結婚し子供が産まれたときも変わることなく、家族ぐるみの付き合いの中、快斗と朱音も一緒に過ごす時間が多かった。
そして由紀恵は、盗一の裏の顔も知っていた。

怪盗キッドとなった盗一を影から支えた女性――それが由紀恵のもうひとつの顔『レディ・レイリー』

世界を股に掛ける大怪盗のパートナーになった篠宮由紀恵は八年前、日本で行われたマジックショーの最中に事故で死亡した。
……黒羽盗一の事故死から、実に二週間後の悲劇だった。
由紀恵の死後、朱音は父の故郷で仕事の拠点地であるイギリスに渡り、高校進学を機に１５才で日本に帰国するまでの七年間をその地で過ごした。
朱音の父の篠宮和也（しのみやかずなり）は先代及び先々代で当主の配偶者に日本人を迎えたが、英国伯爵の血筋を汲む家柄の人間であり、世界展開する高級リゾートホテル『クラウンホテル』グループを一代で築き上げたオーナーだ。

先に待ち受ける運命に導かれるようにして15歳で日本に帰国した朱音は、再会した寺井から真相を告げられる。

そしてその日から一年あまり経った頃、盗一の仕掛けた最後のマジックが明かされるときが来た。

八年の沈黙を破り翻る白いマント。

――怪盗キッドの復活。

すべてを知った快斗が父の後を継いで白き衣を纏うことを決意したのと同じ日、朱音もまた、母と同じようにキッドの助けとなるため共犯者（パートナー）となった。

□■□■□

それが今から半年ほど前の話。

Episode3—Chapter2：ブルーパロットにて～快斗と朱音～（前

更新がまた遅れました…それから話もあまり進んでなくてすみません。

Ｅｐｉｓｏｄｅ３―Ｃｈａｐｔｅｒ２：ブルーパロットにて～快斗と朱音～

「…電話、誰からだったんだ？」

ブルーパロット店内。

快斗と朱音の前にはそれぞれ寺井の煎れたコーヒーとカフェラテのカップが置かれている。熱いブラックコーヒーのおかげでいくらか頭も冴えた快斗が、隣でカップを傾けている朱音に聞いた。

「ん？　あぁ…白馬君からよ」

「へぇ…白馬ねぇ…――って、は、白馬だぁ！？」

さらりと朱音の口から放たれた言葉をそのまま流しそうになった快斗だが、“白馬”と覚えのありすぎる名前を聞いた瞬間、思わず飲みかけたコーヒーを吐き出しそうになった。すんでのところで堪えた自分には拍手を捧げたい。

「白馬って…もちろん…」

「あんたもよく知ってる、白馬探君だけど？」

にっこり笑う朱音の口から聞いた名前が自分の予想通りだと分かった快斗は無意識に重い溜め息を吐いた。

白馬　探。

現・警視庁警視総監の一人息子。　ロンドン帰りで高校生探偵を

名乗る彼とは一体全体どういう因果か知らないが関わりが深い。日本では快斗と同じ高校のクラスメイト……そして朱音とは留学先のイギリスで同じスクールに通っていた友人同士。
キッドを専門に追い続ける白馬はいつの間に確証を得たのか、
怪盗キッド＝黒羽快斗
の方程式を作り素の快斗自身に疑いの目を向けてくることがしばしばあった。
だからといって疑いをかけられている快斗自身も白馬の追求だけで簡単にボロを出すわけがなく、適当かつ上手くはぐらかしてはいるのだが、当の白馬はそれすら快斗の芝居だと分かっているらしくほとんど聞く耳を持たない。
それどころか最近の白馬は快斗に対し、“キッドへと”おせっかいにも手に入れた情報を提供してくることすらあった。
あの怪盗黒猫（シャノワール）との対決の際、白馬の提供した情報がキッドの役に立った一件――それはまだ快斗にとって真新しい記憶の中に入る※まじ快４巻参照※
確かに白馬はキザでイヤミったらしい物言いの持ち主だが、決して悪いヤツではない。それは快斗も一応の付き合いの中では分かっていた。
だからといって仲良くなれるか否かと聞かれれば、快斗は間違いなく、
「無理」
と答えるだろう。
以前に朱音が聞いたときに快斗が言ったのは、
「あーゆータイプは苦手」
と言うことだった。
「…で？　その白馬がどうかしたのかよ？」

「来月の中頃、春休みに合わせて一度日本に帰るって…それだけよ」
「へぇ……白馬のヤツ、また帰ってくんのか」
快斗の覚えている限り、白馬がこの前日本に帰って来たのは昨年末…確かクリスマス前だ。お祭り騒ぎ好きの青子が開いたイヴのクリスマスパーティー、それに白馬も参加していたのをその場にいた快斗も知っていた。
そして翌日のクリスマスはキッドの犯行予告日だったこともあり、例の如く現場にいた白馬とは姿は違えど二日連続で顔を合わすことになった。
年明けしばらくしてから白馬がイギリスに帰ったと朱音から聞いたから…今回の帰国は約二ヶ月ぶりになるか。
「白馬探偵が帰って来るとなると少々厄介ですね…来月の仕事はここ最近のように、一筋縄ではいかないやもしれませんぞ？」
「それでちょうどいいのよ、ジイちゃん。
誰かさんは中森警部だけじゃ退屈みたいだしね」
そう言ってちらりと快斗を見た朱音の目は意地悪げな色を称えており、明らかに快斗をからかっているのが分かる。当の本人にしてもそう思っているのは紛れもない事実であるし朱音も知っているから反論も出来ず……快斗はただ苦笑いするしかなかった。
「おそらくは時期的にも大規模な展示会と重なる頃……お二人共、くれぐれも油断だけはなさらぬよう…」
念を込めた寺井の言葉に、快斗と朱音は互いの目を見てからゆっ

くりと頷いた。
来月末、世間一般の学生は春休みを迎える。
普段どうしても本業である高校生活に時間を割かれてしまう快斗と朱音にとって、長期休暇は何よりも仕事に集中出来る時期だ。
その間に各地で行われる様々な展示会や公演される舞台の中で、来月開催されるジュエリー展にビッグジュエルのひとつが展示されることは快斗と朱音の耳にも入っていた。
その時期に白馬が帰国するとなれば、快斗とは間違いなく現場で会うことになるだろう。

「――ところで、」

朱音がワントーンほど低い声を出した瞬間、穏やかだった空気ががらりと変わる。それを肌で察した快斗が静かに朱音を見る。その目は既に怪盗のものだ。

「来月の仕事のことも含めて、そろそろ“地下”に潜ったほうがいいと思うの」

“地下”と聞いた快斗がしばし思案を巡らせたあと、不適に笑う。

「……なるほどね。情報を仕入れるにはちょうどいい機会かもな」

快斗の言葉に朱音が頷く。
これで決まりだ。

あとの店内には再び穏やかな雰囲気が流れ、和やかに談笑する声が聞こえるのみであった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ０４：誰も知らない《地上の楽園》（前書き）

かなり遅くなりましたが、続きになります。今回あまり会話がありませんが、楽しんでいただけたら幸いです。

Ｅｐｉｓｏｄｅ０４：誰も知らない《地上の楽園》

東京・新宿。
都心の一等地、繁華街より少し離れた閑静な住宅街に、隠れるようにその店は存在した。
――『ＣＬＵＢ　ＵＮＤＥＲＷＯＲＬＤ』
国内のみならず国外の数いる有名なセレブも極秘裏に利用していると噂される完全会員制の高級クラブ。その会員数は、数えるだけでも三桁に上ると言われている。
会員になるには現在のメンバーからの紹介のみという厳しい制限の他、もしなれたとしても多額の会員費がかかるため、会員になれるのは例え金持ちでもその中のごく僅かな人間だけだ。
『ＣＬＵＢ　ＵＮＤＥＲＷＯＲＬＤ』はまさに選び抜かれた者だけが入ることを許された場所であり、そのサービスの良さから《地上の楽園》とも呼ばれていた。
最も、クラブの全貌は会員のみが知るところであって、パラダイスとすら呼ばれるサービスの内容は外の人間は何も知らないのだが。
唯一知っているだろう会員はクラブの取り決めからか、クラブ自体のことに関しては固く口を閉ざしていた。あくまで『ＣＬＵＢ　ＵＮＤＥＲＷＯＲＬＤ』について語られるのは、他人が他人に伝え聞いた噂だけ。

そして噂は噂にしか過ぎず、
『ＣＬＵＢ　ＵＮＤＥＲＷＯＲＬＤ』に関する話すべては意図的に創られ流されたものであることを知るのは、ごく一部の限られた人間だけである――。

□■□■□

ブルーパロットの話から一週間ほど経ったこの日。
現在時刻２２時４５分。
快斗と朱音の二人は新宿に向かう車の中にいた。
快斗は黒いジャケットを着たカジュアルスタイル、朱音は白いシャツに黒のパンツをニーハイブーツにインしたマニッシュ・コーディネイトスタイルと、二人揃って普段着ることのない服を身に着けていた。
朱音に至っては髪型がウィッグでベリーショートになりメイクもしているから実年齢よりも上に見え、快斗もまた、朱音による特殊なメイク技術で多少なりとも顔を変えている。少なくとも今の二人が未成年の――それも１７歳の高校生に見えることはない。
本来の姿と違う、まったくの別人に変身した二人。例え知り合いに会ったとしてもバレる可能性はゼロだ。

「そろそろ着くぞ」

運転席でハンドルを握る快斗が口を開く。
１７歳の快斗はまだ免許を持っていないが、車の運転には慣れていた。
仕事上色々な地域に行く場合、車はどうしても必要な移動手段に

なる。運転免許を持つ寺井だけでは足が足りないのも事実であり、快斗と朱音は仕事を始めるに当たって車の運転を寺井に習い、完璧に出来るようになった。
もしものときの場合に備え、三台ある車はすべて架空名義で購入したものを使用している。もちろん二人が所持している免許も精巧に作られた偽造免許だった。

そうする内に快斗が運転する車は繁華街の明るい道路を通り抜け、閑静な住宅街の一角に入り込むと、やがて静かに停車した。人気がないのを確認してから車を降りた二人が向かったのは一軒の店。一見しただけでは人家にも見える建物は、ある意味知る人ぞ知る隠れた穴場だ。壁面に看板はおろか店の名前すら何処にも書かれていないが、二人の目的地はここで間違いなかった。
慣れた様子で朱音はドア横のベルを押した。
しばらくしてドアが開き、中から現れたのは黒いスーツを着た男性。この店の責任者である支配人だ。
中に通された快斗と朱音は二枚のカードを支配人に差し出した。

「少々お待ち下さい」

支配人が受け取ったカードはこの店の会員証。数分後、確認を済ませた支配人は戻って来ると同時に、二人へと静かに頭を下げた。

「お久しぶりでございます。カイさまにシュリさま。
そして、ようこそ。
『ＣＬＵＢ　ＵＮＤＥＲＷＯＲＬＤ』へ――」

※マニッシュ……女性の服装や髪型などが男性的な装いであること。

Ｅｐｉｓｏｄｅ０４：誰も知らない《地上の楽園》（後書き）

お久しぶりの高室です。
スランプ＋身内の不幸でバタバタしておりました。
年も明け前には更新したかったのですが残念です。
今回の話、実は次の話と繋がってたんですが書いてて長くなりすぎたので分けました。『ＣＬＵＢ　ＵＮＤＥＲＷＯＲＬＤ』の核心は次回に…。
少しずつ話は動く…はず…。

・小さいネタバレ・　『ＣＬＵＢ　ＵＮＤＥＲＷＯＲＬＤ』の名前と中身のイメージはあるバンドの曲からイメージしました（分かる人には分かるかも）この『＝ＤＯＵＢＬＥ＝』シリーズを考えた時からいつか絶対使いたいと思ってました！

ではまた次回に！感想・評価お待ちしております。

Ｅｐｉｓｏｄｅ０５：『ＣＬＵＢ　ＵＮＤＥＲＷＯＲＬＤ』

地下へ続く螺旋階段を降りた先にある重厚なドアが『ＣＬＵＢ　ＵＮＤＥＲＷＯＲＬＤ』へ続く“本当の”入り口だ。この先に何が待っているのか…それは扉を開けた者だけが知るこのクラブの隠された真実の姿。

もう何度もくぐったそのドアを快斗は静かに開けた。

淡い照明に照らされる薄暗い店内、バーカウンターとカジノで見るゲームテーブルがほとんどを占める広い空間は見るからに豪華な内装と調度品で彩られていた。部屋の中に何台もあるゲームテーブルの内、ドアに近いテーブルではルーレットが行われている。多数の人間が囲むテーブルの上には賭け金だろう現金が束のまま無造作に積まれていた。

一般のカジノと違ってチップを一切使わないこの店では、ゲームを含めた施設の利用すべてはその場での現金支払いが決められており、大金が飛び交う光景も珍しくない。一際盛り上がる野次馬の側を通り過ぎた快斗と朱音は、比較的静かなバーカウンターへと足を進めた。

「いらっしゃいませ」

気付いたバーテンダーがグラスを拭く手を止め、二人に椅子を進める。

「ソルティドッグを一つと、あとは…」

「オレはノンアルコール。
種類はそうだなぁ……瀬野（せの）さんのオススメに任せるよ」

椅子に腰掛けながらドリンクを注文すると、瀬野と呼ばれたバーテンダーはおや、と首を傾げた。

「今日は飲まれないので？」

「まあね。オレ、今日は車だから…」

その理由に瀬野は納得したように頷き、

「少々お待ち下さい」と告げるとカクテルの製作に取りかかった。

と、快斗の足を朱音が小突く。何事かと隣の朱音を見れば、当の本人は後ろを振り返って違うところに目を向けていた。

「どうしたんだよ？」

「見て。あそこの壁際にいる男、ニュースで見たことがある顔だわ」

小声で告げる朱音。彼女示す方に目だけを向けた快斗は、内心あ、と声を上げた。

（あいつは確か…この間ニュースでやってた事件の犯人じゃねーか…）

それもつい最近だ。強盗に入った家で殺人を犯して逃走し、指名手配されたのを覚えている。犯人は分かったもののその後の捜査が難航していると報道されていた。まさか犯人がまだ都内の――しかも犯行現場に近い新宿にいるとは警察も思っていないだろう。

（相手の裏の裏をかく、か。オレ達もよくやる手だな。それに――）

「――ここにいれば通報される心配もない。考えたわね」

快斗にだけ聞こえる声で朱音が言った。

（確かに……）

あの手配犯は一番いい手を使った、と快斗も思った。

（……まぁ、このクラブにいる人間はどいつも似たようなモンだけどな）

ざっと今見渡しただけでも見覚えのある指名手配犯に裏稼業の人間と……ヤバそうなのが何人もいる。

自分達もそうだが、

『ＣＬＵＢ　ＵＮＤＥＲＷＯＲＬＤ』の会員のほとんどは公には言えない仕事――いわゆる“裏”の仕事を生業（なりわい）にしている人間や警察に追われている犯罪者達ばかりだ。

セレブが利用しているなんて噂はまったくのデタラメ。出所は定かではないが、クラブの人間が意図的に流したものらしい。詳しいことは快斗達も知らない。

「お待たせ致しました」

瀬野が声をかけ、敷いたコースターの上に二つのグラスを置いた。

「こちらがソルティドッグになります。カイさまにはノンアルコールでシャーリー・テンプルを作らせて頂きました。私のオススメですよ」

「お。ありがと、瀬野さん」

礼を言ってグラスに口を付ける快斗の横で、朱音は財布から取り出した二人分のドリンク代金を瀬野に渡すと共にあるもの――銀色に輝く鍵をカウンターの上に置いた。鍵にはキーチェーンがかけられており、
『Ｎｏ．１３』と刻印されたプレートが繋がっている。
一見ホテルの鍵にも見えるそれは鍵本体が精巧に作られた代物であり、同じものは二人が持つ以外はクラブが管理するマスターキーのみ。
差し出された鍵を無言で受け取った瀬野は二人に一礼すると側にいた他のバーテンダーに何事かを告げ、静かに裏手のドアから出て行った。

十五分ほど経った頃、一人のバーテンダーが話をしていた二人の前に立つ。すっかり空になったグラスを片付けると、朱音の前に一枚のコースターを差し出した。
朱音がバーテンダーを見遣ると目の前の彼はただ頷き、そのまま何も言わず他の客のところに行ってしまった。
手にした白い紙のコースター、裏には黒いボールペンで文字が書き込まれていた。

『Ｒｏｏｍ　Ｎｏ，００－１
１０分後　』

それをポケットにしまうと快斗は椅子から立ち上がり、指定された場所へと向かうべく朱音と共に入り口とは違うドアへと歩き出した。

「いい情報が入ってればいいけどな」

「さぁ…それはここの腕次第だと思うけど」

「違いねぇな。そんじゃ、行くとすっか」

他人に聞こえない程度の声で会話をしながら、快斗と朱音はメインルームから姿を消した。消えた二人に気付くものはいなかった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ０５：『ＣＬＵＢ　ＵＮＤＥＲＷＯＲＬＤ』（後書き）

こんばんは、高室です。
日々、試行錯誤しながら文章を書いておりますが、高室の書く文章が読者の皆さま方に分かりやすくなってるか…気になるところです。オリジナル設定が多々ありますが、なるべく分かりやすくこの世界観に入れるように頑張って書いていきたいと思います。なので、どしどしご意見や感想などをお待ちしてます。

『ＣＬＵＢ　ＵＮＤＥＲＷＯＲＬＤ』の実際の姿が何なのか、と言うことはこれから徐々に明らかになります。あの鍵の存在も。まだ快斗サイドは続きます！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8104b/

＝DOUBLE＝

2010年10月10日00時26分発行